

和歌山県南部方言における文末以外で用いられる 「ノ」と「ヨ」に関する覚え書き

大野 仁 美

1. 目的

本論文は、和歌山県南部の方言（以下南紀方言と呼ぶ）において、単独で呼びかけとして用いられ、文節末に付加されて用いられる「ノ」「ヨ」を扱う。これらは、いわゆる標準とされる現代日本語の関東中心部の方言（以下現代日本語と呼ぶ）でいうと：

- ・話しかける時に単独で用いられる「ネ(一)」やそれを重ねた
「ネ(一)ネ(一)」 (共に長く発音されることが多い)
- ・会話中にはさみ込まれて相手への呼びかけとして用いられる
「あなたネ」
- ・文節末に付加される「勉強はネ、たいへんだからネ」の「ネ」

などに対応するものである。

(1) 「ネ、○○ちゃんネ、勉強はネ、たいへんだからネ、ちゃんとやろうね。」
上記例文(1)においては、終助詞にもセグメンタルには同形の「ね」が用いられている。これら間投助詞をはじめとするそれぞれと終助詞は、そもそも統語的なふるまいが異なるが、機能的な観点からこれら（の一部）を統一的に扱おうとする見方が多く存在する(益岡・田窪1992, 伊豆原1993, 神尾1998, etc.)。とはいえ、現代日本語では、間投助詞その他としても終助詞としても

同形（少なくともセグメンタルに）のものが用いられるケースは「ネ」のみであり、代表的な終助詞の1つである「ヨ」は単独・間投助詞としての使用に話者や文体上の制限がある。「サ」は、高い頻度で話者を選ばずに用いられる間投助詞であるが、「サ」の終助詞としての用いられ方には制限がある。このように、助詞「ネ」・「ヨ」・「サ」は分布が異なるので、終助詞と文節末に付加される間投助詞、さらにその他のものが同形である場合、それらをどのように扱うかという問題は、現代日本語では「ネ」という一つの形式の問題に収斂してしまう。

一方南紀方言では、代表的な終助詞である「ノ（現代日本語の「ネ」に対応する）」・「ヨ」と同形の形式が、これらすべての位置に高い頻度で、話者に関する制限なしに出現する。また、現代日本語の「サ」に対応する形式は存在しない。先の例文(1)は、南紀方言では以下ようになる¹。

(2) 「ノ、○○ちゃんノ、勉強はノ、たいへんやからノ、ちゃんとやるの。」

(3) 「ヨ、○○ちゃんヨ、勉強はヨ、たいへんやからヨ、ちゃんとやるよ。」

これら「ノ」と「ヨ」は、接続した場合の一例²を除き、同じ生起分布を示す。とすれば、これらが共通の機能を持つものなのか、もしそうであるならば生起する位置によってどのような違いが生じるのか、そもそも両者の違いは何か、話者はどのようにそれを使い分けているのか、という問いが生じる。本稿は、この問いに答える準備段階として、これらの文末の位置以外の場所で生起する「ノ」と「ヨ」の意味の相違を考察するにあたり、主に内省によって問題点を整理し記述しようとするものである。以下、「ノ」・「ヨ」の生起する位置を第2節で、それぞれの用いられ方の違いとそこから考えられる意味の違いを第3節で扱う。考察対象となっている間投助詞等の表示方法は、

¹ 本稿で用いる例文は筆者の作例による。筆者の生年と言語形成背景は以下の通り：
生年：1960年代 出身および生育地：西牟婁郡（現東牟婁郡）串本町（～1980年代まで） 母親および母方の祖父母：西牟婁郡すみ町出身 父親：北海道出身

² 南紀方言では、「ノ」と「ヨ」を接続した「ノヨ」という間投助詞が用いられる一方で、文末において現代日本語に存在する「ヨ」と「ノ（現代日本語ではネ）」を接続した「ヨノ（現代日本語ではヨネ）」という形式は存在しない。この接続した形式については、本稿では扱わない。

現代日本語の例文においては当該箇所をカタカナにして、南紀方言の例文においては例文全体をカタカナ表示し当該箇所にはさらに下線を引いて示す。

2. 「ノ」・「ヨ」の生起する位置

この章では、南紀方言における「ノ」・「ヨ」の生起位置を、現代日本語「ネ」・「ヨ」・「サ」のそれと対比させながら、記述する。

現代日本語で文節末に付加される間投助詞の代表的なものは「ネ」と「サ」である。このうち、「サ」は文末では使用制限があり、頻度が低い。

(4) *「さ³、○○ちゃんサ、いい子だからサ、勉強するさ。」

逆に、現代日本語の間投助詞「ヨ」は、呼びかけや文節末では使用制限があり、頻度も低い。女性は「ヨ」を用いず、男性も親しい間柄で、あるいはぞんざいだったり強い口調で主張したり威嚇的であったりする場合においてのみ用いられる。一方、文末に用いられる「ヨ」にはそのような効果はなく、男女や年齢差や発話内容に関係なく用いられる。このように、話者や文体に制限がある場合は△で示すこととする。

(5) 「ヨ、○○ちゃんヨ、いい子だからヨ、、、」(使用者および文体・使用場面に制限あり)

表1 現代日本語における「ネ」・「ヨ」・「サ」の生起位置

位置→ 形式↓	単独	文節末	文末
ネ	○	○	○
ヨ	△	△	○
サ	×	○	△

○：生起可 ×：生起不可 △：生起可(制限有)

³ 「サ」に関しては、何かを促すために声をかける時の「サ(ア)」が存在するが、これは同じ機能のものが、間投助詞としての「サ」を持たない南紀方言にも存在する。したがって文節末に高い頻度で用いられる「サ」とは意味的になんの関連性もない別形式と考える。

一方南紀方言では、「ヨ」は単独・文節末・文末のいずれの位置でも、男女ともに、また丁寧さの相違もなく用いられる。丁寧さや親しさのスタイルの違いは現代日本語の「ネ」に相当する「ナ」・「ニ」・「ネ」・「ノ」⁴によって表現し分けられているが、本稿では「ノ」をこれらの代表的形式として扱う。なお現代日本語の「サ」に当たる形式は存在しない。

(6)*「サ、○○チャンサ、エエコヤカラサ、、、」(南紀方言に間投助詞の「サ」は存在しない)

南紀方言では、「ノ」と「ヨ」がほぼ同じ分布をしめし⁵、いずれも単独で・間投助詞として・終助詞として用いられる。南紀方言の間投助詞としての「ヨ」は、主に男性話者によって限られた場面でしか用いられない現代日本語の「ヨ」と異なり、話者の性別に関わりなく、「ノ」と同様に高い頻度で用いられる。このように、「ノ」も「ヨ」も男女ともに用いられ、現代日本語においてみられるような文体差による使用制限も存在しない。これら2つが接続した一例(間投助詞としての「ノヨ」)を除き、この二つの形式が生起分布上同一カテゴリーであることを示す状況が存在している。

表2 南紀方言における「ノ」・「ヨ」の生起位置

位置→ 形式↓	単独	文節末	文末
ノ	○	○	○
ヨ	○	○	○

○：生起可 ×：生起不可 △：生起可（制限有）

⁴ 「ノ」と置き換え可能な形式（基本的な意味は変わらず、スタイルを変える）の使い分けられ方は以下の通り：

- ナ 目上から目下へあるいは親しい間で使われる（男女ともに）：男性がより頻繁に用いる
- ニ 地域的変種
- ネ 若年層において優勢：女性がより頻繁に用いる
- ノ 中高年以上において優勢

⁵ 注2に記した例外を除く。

では、「ㇿ」と「ㇾ」はどのように使い分けられているのか。南紀方言では、文末に用いられる「ㇿ」・「ㇾ」と、単独や間投助詞として用いられる「ㇿ」・「ㇾ」は、同じものなのか、何か共通する要素があるのだろうか。「ㇿ」と「ㇾ」がそれぞれの位置（単独・文節末・文末）におかれた場合のピッチパターンはかならずしも同じではないので、これらが実際に同一の形式であるかどうかの判断は現段階ではできないが、これらの談話上の機能には共通点があるという見通しを筆者はもっている。この問題を考えるために以下、文末以外での生起位置におけるこれらの用いられ方の記述・分析を行う。

3. 「ㇿ」と「ㇾ」の分析

この節では、「ㇿ」・「ㇾ」が文末以外の場所におかれた場合について、どのように使い分けられているか見てゆく。まず間投詞として単独で呼びかけなどに用いられる場合(3.1)と、先行する発話に続けてそれに対する返事や念押し・確認などに用いられる場合(3.2)を見る。次に、単独ではないが、文末以外の場所に生起する場合を見る。これには、聞き手に対する呼称（名前や愛称、親族名称、役職名など）に付いて呼格的に用いられる場合（3.3）と、間投助詞として用いられる場合(3.4)とがある。呼格的用法は「ㇿ」・「ㇾ」が単独で用いられているわけではないが、全体として文から独立した要素を形成し間投詞的な振る舞いをするので、間投詞の「ㇿ」・「ㇾ」と、間投助詞「ㇿ」・「ㇾ」両者の中間的存在である。これらすべての位置で用いられる「ㇿ」と「ㇾ」は必須成分ではなく、文を構成する要素にはならず、これらの存在の有無が文の文法性に関与することはない。

以下の例にはそれぞれの場合におけるピッチパターンを付記する。これは著者の内省によるもので、HとLおよびその組み合わせで示す。

3.1 単独：呼びかけ

「ㇿ」・「ㇾ」が他の要素を全く伴わず間投詞として用いられる場合、機能

は二つある。一つは、相手に呼びかけたり話しかけたりする時 (現代日本語の「ネ(一)HL」に同じ) に用いられるもので、ピッチパターンは(HL)である。長く発音されることが多い。下の例文のように2回繰り返すこともある (ピッチは(HLHL)となる)。

(7) 「ネ(一) HL」

(8) 「ノ(一) HL」

(9) 「ヨ(一) HL」

(10) 「ネ(一) ネ(一) HLHL」

(11) 「ノ(一) ノ(一) HLHL」

(12) 「ヨ(一) ヨー(一) HLHL」

繰り返しのある例文 (10)～(12)は、それのない例文 (7)～(9)に比べ、聞き手が話し手からより近い位置におり、より親しみの強い表現であるという違いがある。つまり、話し手と聞き手の間の距離が、物理的にも心理的にもより近いときにのみ用いられる。

次に、「ノ」と「ヨ」の違いについて考える。「ノ」を用いた例文(8)・(11)と、「ヨ」を用いた例文(9)・(12)においても、まず第一に、話し手と聞き手の距離の違いが挙げられる。「ノ」は非常に近いところにいる相手にこちらに注目させるために用いる。典型的には、すぐ隣や前後の席に着席している相手、手を伸ばせば触れることが出来るくらいの距離内にいる相手に対して用いる。一方「ヨ」はそれより離れていて、相手が見えない位置にいる時、あるいは近くにいても、聞き手の関心が話し手にない時に、その関心を話し手側にむける時に用いられる。

3. 2 単独：先行する発話に続けて用いられる場合

単独で使用される場合のもう一つの機能は、発話の後に念押しや確認のために付加して用いられるものである。現代日本語の「ちゃんとやってね、ネH」あるいは「そんなのむりだよ、ネ(一)HL」にあたる。後者は長くなる傾向がある。

以下の例文に見るように、現代日本語では、依頼であれ、命令であれ、念押しを付け加えるためには「ネ」が用いられる。男性が丁寧でない言い方を用いる場合でも、「ネ」の丁寧でないバリエーションとしての「ナ」が出現し、「ヨ」は用いられない。例文(16)が示すように、先行する文の末尾が「ヨ」であっても、そうである。したがって、現代日本語の間投詞の「ヨ」には、この用法は存在しない。

(13) 「今日は家にいなさいよ、ネ? H/*ヨ」(命令の念押し)

(14) 「今日は家にいてね、ネ? H/*ヨ」(依頼の念押し)

(15) 「これでいいでしょ、ネ? H/*ヨ」(確認)

(16) 「今日は家にいる(よ)、ナ? H/*ヨ」(命令の念押し)

<男性:ぞんざい>

(17) 「これでいいだろ、ナ? H/*ヨ」(確認<男性:ぞんざい>)

(話者や文体に使用制限がある場合は<>内に示す)

次に、これらを南紀方言で言い換えた例文を見てみよう。上記の現代日本語の例文にそれぞれ対応させて示す(例文15と17の区別は南紀方言にはない)。以下のように、依頼や命令の念押しでは、「ノ」・「ヨ」共に使用できる

(ピッチパタンは(H))のに対し、確認では「ノ」は可、「ヨ」は不可である。

(13') 「キョーワ イエニ オランシヨ、ノ H/ヨ H」(命令の念押し)

(14') 「キョーワ イエニ オッテヨ、ノ H/ヨ H」(依頼の念押し)

(15') 「コレデ エーヤロ、ノ H/*ヨ」(確認)

(16') 「キョーワ イエニ オレヨ、ノ H/ヨ H」(命令の念押し)

<男性:ぞんざい>

念押しのピッチパタンは(H)のみであるが、確認には2パターンあって、ひとつは(H)、もうひとつは(HL)である。ピッチパタン(H)の場合は、発話内容を聞き手に確認、ピッチパタン(HL)の方は聞き手が二人以上いて、先行する発話を向けている聞き手Aとは異なる聞き手Bに向けての確認に用いられる。

- (18) 「これでいいよ、ネ? H/HL / *ヨ」 (確認 H/
第三者に問いかけて確認 HL)
- (18') 「コレデ エーワ⁶、ノ? H/HL / *ヨ」
(確認 H/
第三者に問いかけて確認 HL)

例文(18)・(18')は、ピッチが(H)ならば、聞き手に「私はこれで良い。あなたもそう思うよね?」と確認している。この場合、聞き手とのあいだに「これで良い」という了解はこの時点より前にはできておらず、ここで新たに両者のあいだに形成されようとしている。一方、ピッチが(HL)の場合は、複数の聞き手がおり、聞き手Aに「これでいいよ」と言って、それを聞き手Bに「あなたもそう思うよね?」と確認を取っている。「これで良い」という自分が下した判断に関して、少なくとも話し手は聞き手Bもそう判断するであろうという認識をもっている。その判断を聞き手Aに言った後で、「あなたもそう思うよね?」と聞き手Bにそれを確認している⁷。なおいずれの場合も「確認」なので、「ヨ」は用いられない。

ここで見られる「ノ」と「ヨ」の間の相違——念押しには両者ともに用いられるが、確認には「ヨ」は用いられない——は、「ノ」と「ヨ」に意味的な違いが存在することをあらわしている。

3.3 文節末：呼びかけ

ここでは、相手の名称に、他の助詞など挟まず直接つけて、相手に呼びかけるときに用いられる形式を扱う。呼びかけは名称だけでも成り立つので、

⁶ この例文で南紀方言の終助詞に「ワ」が用いられる点に関しては、大野(2010)参照。

⁷ 現代日本語にはピッチパタン(LH)の「ネ」も存在する。

「就職決まらなかつたらたいへんだ(よ)ネ LH」「ネ LH」は、話し手と聞き手の間で新たに今了解事項ができてつあるときに用いられる。南紀方言ではこの場合もピッチは(HL)であり、「ノ(LH)」は存在しない。「シューショク キマランカッターラ タイヘンヤ(ガイ)ノ HL」「ノ HL」

これは呼びかけに必須の要素ではない。また呼びかけは「名称あるいは呼称(＋間投助詞)」の全体で独立した成分を形成しているが、文を成立させる文法的構成要素にはなっていない。この呼格的な用法は、現代日本語では、書き言葉としては存在するが、(eg. 『鳩よ!』) <雑誌名>など) 話し言葉では話者や文体に制限がある。

呼びかけには、会話途中で話し相手に呼びかけとして用いられる場合と、会話の場をまだ共有していない相手、つまり話し手に関心を払っていない相手に呼びかける場合とが存在する。後者の、相手がこちらに注目していない・あるいは少し離れた場所にいる場合は、「ヨ」しか使えない。ここでも、「ノ」と「ヨ」の使い分けには、相手との距離という要素が絡んでいるようだ。この場合、「ヨ」は長く発音される傾向が有り、ピッチパターンは(H(L)) (近くから／柔らかく呼びかける時)あるいは(LL) (遠くから／強く呼びかけるとき)である。

(19) 「オマエヨ LL!」(夫が少し離れたところにいる妻に呼びかけて)

(20) 「○○チャンヨ HL」(階下から2階にいる子供に呼びかけて)

相手が既にこちらに注目していてこちらの話を聞いている時、つまりすでに話し手と会話の場を共有している時に間投詞的に呼びかける場合は、「ノ」も「ヨ」も用いられる。以下、呼びかけ・文節末・念押しを含む例文を見てみよう。南紀方言では、例文(23)・(24)のように、これらにすべて同形式を用いることができる。

(21) 「○○ちゃんネ、私ちょっとあっち行ってくるからネ、ここで待っててよ、ネ。」

(22) 「○○ちゃんサ、私ちょっとあっち行ってくるからサ、ここで待っててよ、ネ。」

(23) 「○○チャンノ、アタシ チョット アッチ イッテクルカラノ、ココデ マットキナヨ⁸、ノ。」

⁸ 本稿では終助詞としての「ノ」・「ヨ」は扱わないが、例文(23)に終助詞「ノ」を用いることも可能である。

和歌山県南部方言における文末以外で用いられる「ノ」と「ヨ」に関する覚え書き（大野 仁美）

(24) 「〇〇チャンヨ、アタシ チョット アッチ イツテクルカラヨ、ココ
デ マットキナヨ、ヨ。」

例文(23)と(24)の意味の違いについては、間投助詞としての例も含むので、次節で合わせて考察する。

3.4 文節末：いわゆる間投助詞として

間投助詞は、文節に付与されて、発話がポーズなどで一時中断するが、話者がターンを譲るつもりはないところで用いられる。現代日本語では、「ネ」・「ヨ」・「サ」が存在する。例文(25)が聞き手に伝えたい内容を示した文だとすると、それを実際に聞き手に向けた発話としたときに、例文(26)～(28)のように、それぞれ「ネ」・「ヨ」・「サ」を付加することができる。なお文末におかれている述語動詞「拾った」の形、つまりそこにどのような終助詞等が接続されるか等、については、ここでは考慮しないのでカッコ内に入れることとする。

(25) 今朝、学校に来る途中で、落とし物を拾った。

(26) 今朝ネ、学校にネ、来る途中でネ、落とし物をネ、(拾った。)

(27) 今朝ヨ、学校にヨ、来る途中でヨ、落とし物をヨ、(拾った。)

(28) 今朝サ、学校にサ、来る途中でサ、落とし物をサ、(拾った。)

間投助詞はすべての文節末に使用することが可能であるが、実際にはそうすると過剰である。発話がまだ継続中であることを示すのだから、話し手が区切りを入れず話しているとき、つまり一塊の発話が続いていることが明確である時には用いられない。

この中で、「ネ」と「サ」は男女ともに使用することができるが、「ヨ」は通常男性のみに限られ、使用できる場面も限られる。一方、南紀方言には「サ」は存在しないが、「ヨ」⁹は話者を選ばず用いられ、意味的にも現代日本語の

⁹ 筆者は大学入学直後まだ東京方言に慣れない時にふと緊張が緩んで「サ」を用いるべきところに「ヨ」を用い聞き手に非常に驚かれた経験がある。関東の話し手にとって、間投助詞の「ヨ」と若い女性話者は結びつきにくいものであるようだ。

- 「サ」と置き換えられるものであると考えられる。ピッチは(HL)である。
- (29)「ケサ_△、ガッコーヘ_△、クルトチューデ_△、オトシモノヲ_△、(ヒロータ)。」
- (30)「ケサ_▽、ガッコーヘ_▽、クルトチューデ_▽、オトシモノヲ_▽、(ヒロータ)。」

例文(29)と(30)の違いは何か。あまり鮮明ではないが、例文(29)が、どちらかという聞き手にも関係のある話として落とし物の話をしているように感じられるのに対して、(30)は聞き手には関係のない話として話しているように感じられる。とすれば、聞き手の関与が必須である、命令や依頼の場合はどうなるだろうか。先に見た、例文(21)～(24)を再掲して考えてみる。

- (21)「○○ちゃんネ、私ちょっとあっちに行ってくるからネ、ここで待ってね、ネ。」
- (22)「○○ちゃんサ、私ちょっとあっちに行ってくるからサ、ここで待ってね、ネ。」
- (23)「○○チャン_△、アタシ チョット アッチ イッテクルカラ_△、ココデ マットキナヨ、_△。」
- (24)「○○チャン_▽、アタシ チョット アッチ イッテクルカラ_▽、ココデ マットキナヨ、_▽。」

この場合は、「_△」を使った例文(23)の場合、相手をさとするように言っているのに対し、「_▽」を使った例文(24)は、話し手が一方的に、主張に近いような感じで伝えていることが、比較的明瞭にとらえられる。この違いは、現代日本語の「ネ」と「サ」をそれぞれ用いた例文(21)の(22)のあいだにも、例文(21)のかすかなしつこさとして感じとれる。また、呼びかけにおいても、「_▽」は、話し手がこのような話をするということを聞き手が予測していないような内容のことを伝える場合に、「_△」は、既に共有された内容や、相手が予測しているであろうと思われるような内容のことを伝える場合に用いられるの

ではないかと考えられる。

この「一方的」という要素が「ノ」と「ヨ」の使い分けにどのように関与しているのか確認するために、相手を非難する場合、相手が認めないことを強く主張する場合ではどうなるかみてみよう。以下は相手を非難する発話である。

(31)「あのネ、自分でネ、やるってネ、言ったんじゃない。」

(32)「あのサ、自分でサ、やるってサ、言ったんじゃない。」

(33)「アノノ、ジブンデノ、ヤルッテノ、ユータンヤロ。」

(34)「アノヨ、ジブンデヨ、ヤルッテヨ、ユータンヤロ。」

相手を非難するのに通常用いられるのは(34)である。一方、例文(33)は、聞き手に対して「本当は自分でもまちがったことをやったとわかっているだろうに」という含みをもって、少しあきれたような、隠そうとしていることを見透かしているような物言いである。この違いは、現代日本語の「ネ」と「サ」を用いた(31)・(32)にも感じられる。この、「ノ」と「ヨ」のあいだに感じられる意味的相違点を暫定的に「相互的」・「一方的」と呼ぶことにする。

4. まとめと今後の課題

本稿では文末以外に置かれる「ノ」・「ヨ」の記述分析をおこなった。3節で見てきた、両者を対立させる概念を生起位置ごとに表にまとめると以下のようなになる。

表3 南紀方言の文末以外の位置に用いられる「ノ」と「ヨ」の対立点

	単独			呼称に付加	文節末
	呼びかけ	念押し	確認	呼びかけ	間投助詞
ノ	近	○	○	近	相互的
ヨ	遠	○	×	遠	一方的

○ 使用可 × 使用不可

著者は、南紀方言において文末に終助詞として用いられる「ノ」・「ヨ」とこれらは、親縁性が強く共通の機能をもっていると考えている。次稿では、これらと終助詞として用いられる「ノ」・「ヨ」を統一的にとらえる考察を展開したい。今後も、本稿での考察を検証すると同時に、以下のような研究にとりくむため、引き続き継続して様々な年代の話者による談話資料を収集する予定である。

- 1) 「ノ」とその変種の使用の年代差（「ノ」から「ネ」への変化）
- 2) 「ノ」と「ヨ」が接続した間投助詞「ノヨ」と単独の間投助詞「ノ」・「ヨ」の生起パタンの相違
- 3) 会話資料のピッチパタンの計測と分析

謝辞

本論は、2010年度麗澤大学特別研究助成をうけて実施した研究の成果の一部である。本稿で行った考察の参考とした談話資料の収集に際してYK氏・NM氏・OA氏（和歌山県東牟婁郡串本町出身 40代女性）にご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

参考文献

- 井豆原英子 1993「「ね」と「よ」再考——「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から——」『日本語教育』80、p. 103-114、日本語教育学会。
- 大野仁美 2010「南紀方言における終助詞「ヨ」の意味機能分析試論」上野善道篇『日本語研究の12章』210-223、明治書院。
- 神尾昭雄 1990『情報のなわばり理論 言語の機能的分析』大修館書店。
- 益岡隆志・田窪行則 1992『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版。